

社会学部報

◇学術講演会および研究会

- 1999年 6月16日 (水) (研究会例会)
講師 Ratna Ghosh (ラトナ ゴッシュ) 氏
マギル大学 教授 客員教授
「Construction of Values in Education: MEXCO, CANADA, and the United States」
- 1999年 6月23日 (水) (研究会特別例会)
講師 山口 一男 先生
シカゴ大学 社会学部教授
(計量、数理、理論社会学専攻)
「社会的ネットワークと情報伝播のモデルについて」
- 1999年 6月30日 (水) (研究会例会)
講師 室田 保夫氏
社会学部教授
「留岡幸助の事業と思想—社会改良とジャーナリズム—」
- 1999年10月27日 (水) (研究会例会)
講師 パトリック・ペイヴェール氏
フランス・社会科学高等研究院
日本研究所 所長
「19世紀フランス社会学と政治文化」

◇社会学部教職員人権問題研修会

- 1999年 6月16日 (水)
講師 クララ・ビスワス氏
バングラデシュに生まれる。
ソーシャルワーカーとしてダッカのスラムで働いた後、1988年～1998年国際飢餓対策機構のプロジェクトマネージャーをつとめる。
1998年 4月より来日し、仙台学生センターのスタッフとして活動中。
「バングラデシュの女性が置かれている状況から人権問題を考える」

◇海外出張

- 真鍋 一史 教授
5月23日から 5月30日まで
Large Scale Data Analysis に関する国際会議に出席し研究発表するため、ドイツへ

- 浅野 仁 教授
6月7日から 6月10日まで
Asia/Oceania Congress of Gerontology にて発表するため、韓国へ
- 久保田 稔 教授
6月17日から 6月27日まで
アメリカ糖尿病学会年次集会参加のため、アメリカへ
- 藤原 武弘 教授
6月21日から 7月2日まで
1999 European ACR (The Association for Consumer Research) Conference にて発表のため、フランスへ
- 立木 茂雄 教授
7月10日から 7月17日まで
第24回自然災害ワークショップでの研究発表のため、アメリカへ
- 岡田 弥生 助教授
7月25日から 8月6日まで
Faulkner and Yoknapatawpha Conference に出席し、討議に参加するため、アメリカへ
- 藤戸 淑子 教授
7月28日から 9月1日まで
ロンドン大学 Birkbeck College Summer School 聴講および資料収集のため、イギリスへ
- 藤原 武弘 教授
8月3日から 8月8日まで
第3回アジア社会心理学会にて発表のため、台湾へ
- アラン プレイディ 助教授
8月9日から 9月9日まで
博士論文執筆経過を担当教授に報告するため、イギリスへ
- 福地 直子 専任講師
8月19日から 8月26日まで
アメリカ心理学会で発表のため、アメリカへ
- ルース M. グルーベル 教授
9月1日から 9月11日まで
課外活動団体「ハピタットフォーヒューマニティ」引率のため、フィリピンへ
- 打樋 啓史 専任講師
9月1日から 9月11日まで

- 課外活動団体「ハビタットフォーヒューマニティ」引率のため、フィリピンへ
- 石川 明 教授
9月17日から9月27日まで
ドイツにおけるプレス「内部的自由」の調査・資料収集のため、ドイツへ
 - 高坂 健次 教授
9月20日から9月27日まで
中国人民大学並びに天津社会科学院との学術交流（講演）のため、中国へ
 - アラン プレイディ 助教授
9月30日から10月3日まで
2nd Pan-Asia Conference にて研究報告のため、韓国へ
 - 川島 恵美 専任講師
11月7日から11月14日まで
第4回ユニバーサルボランティア・ミシガン大学老年医学センター研修に日本側コーディネーターとして参加するため、アメリカへ

◇新刊書紹介

- 山本 剛郎 教授（共編著）
『阪神・淡路大震災の社会学 第1・2・3巻』昭和堂 1999. 2
- 山本 剛郎 教授（分担執筆）
「コープこうべと大震災」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第1巻 被災と救援の社会学』昭和堂 1999. 2
- 宮原 浩二郎 教授（分担執筆）
「被災の社会地図—芦屋市の場合」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第1巻 被災と救援の社会学』昭和堂 1999. 2
- 荻野 昌弘 助教授（分担執筆）
「震災後の被災者の移動・移転—震災から8月まで」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第1巻 被災と救援の社会学』昭和堂 1999. 2
- 高坂 健次 教授（分担執筆）
「行政と政策スコープ—規範的 sociology の課題」
山本 剛郎 共編著
- 『阪神・淡路大震災の社会学 第2巻 避難生活の社会学』昭和堂 1999. 2
- 立木 茂雄 教授（分担執筆）
「震災ストレスと家族システムの対処に関する計量的研究」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第2巻 避難生活の社会学』昭和堂 1999. 2
- 荻野 昌弘 助教授（分担執筆）
「地方自治体の対応と住民」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第2巻 避難生活の社会学』昭和堂 1999. 2
- 荻野 昌弘 助教授（分担執筆）
「あるマンションの再建問題」
山本 剛郎 共編著
『阪神・淡路大震災の社会学 第3巻 復興・防災まちづくりの社会学』昭和堂 1999. 2
- 山本 剛郎 教授（分担執筆）
「阪神・淡路大震災と住民の対応」
成田孝三編
『大都市圏研究（上）』大明堂 1999. 3
- 浅野 仁 教授（共編著）
『老人福祉論』中央法規出版 1999. 4
- 高坂 健次 教授（分担執筆）
「ポスト生涯学習のめざすもの」
村田 治編著
『生涯学習時代における大学の戦略』ナカニシヤ出版 1999. 3
- 芝野 松次郎 教授（分担執筆）
「直接援助技術における効果測定と評価」
福祉士養成講座編集委員会編
『社会福祉援助技術各論Ⅰ』中央法規出版 1999. 4
- 宮原 浩二郎 教授（分担執筆）
「「個人」の社会学」
川崎賢一・藤村正之編著
『社会学の宇宙 ver. 1. 3』恒星社厚生閣 1999. 3
- 八木 克正 教授（単著）
『英語の文法と語法』研究社出版 1999. 4

- 大谷 信介 教授 (分担執筆)
『Personal Community Networks in Contemporary Japan』
Barry Wellman 編
『Networks in the global village』Westview Press 1999.
- 川久保 美智子 教授 (分担執筆)
「アメリカ人社員の意識変化」
関西学院大学アメリカ研究会編
『変貌するアメリカ』晃洋書房 1999. 3
- 三浦 耕吉郎 助教授 (分担執筆)
「被差別部落で聞く」
満田久義・青木康容編著
『社会学への誘い』朝日新聞社 1999. 4
- 高坂 健次 教授 (共著)
『通史 日本の科学技術 5-Ⅱ』学陽書房 1999. 3
- 藤原 武弘 教授 (分担執筆)
「人間関係からみた夫婦」
関 峯一編
『成人期の人間関係』培風館 1999. 4
- 立木 茂雄 教授 (単著)
『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店 1999. 3
- ルース M. グルーベル 教授 (分担執筆)
「The Consumer Co-op in Japan」
ELLEN FURLOUGH and CARL STRIKWERDA 編
『Consumers against Capitalism?』
Rowman & Littlefield Publishers 1999.
- 室田 保夫 教授 (共編著)
『石井十次の研究』角川書店 1999. 3
- 高田 真治 教授 (共編著)
『社会福祉援助技術各論Ⅱ』中央法規出版 1999. 4
- 高田 真治 教授 (共編著)
『社会福祉の思想と人間観』ミネルヴァ書房 1999. 6
- 三浦 耕吉郎 助教授 (共訳)
A. シュネイバーク/K. A. ゲールド著
『環境と社会—果てしなき対立の構図—』
ミネルヴァ書房 1999. 6
- 難波 功士 専任講師 (分担執筆)
「社会学と広告、さらにはマーケティング」
石井淳蔵・石原武政編著
『マーケティング・ダイアログ—意味の場としての市場—』 白桃書房 1999. 7
- 森川 甫 教授 (分担執筆)
「近世フランス女性の教養へのアプローチ」
宮谷宣史編著
『性の意味—キリスト教の視点から—』新教出版社 1999. 8
- 津金澤 聰廣 教授 (分担執筆)
「メディア・イベントとしての軍歌・軍国歌謡」
『近代日本文化論10 戦争と軍隊』岩波書店 1999. 8
- 立木 茂雄 教授 (分担執筆)
『第6回日米都市防災会議プロシーディングス』地域安全学会編 (ISSS) 1999. 8
- 高田 真治 教授 (編著)
『講座 戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望 I 総括と展望』ドメス出版 1999. 10
- 浅野 仁 教授 (分担執筆)
「高齢者福祉—処遇からケアサービスへの展開」
『講座 戦後社会福祉の総括と二一世紀への展望 I 総括と展望』ドメス出版 1999. 10
- 川島 恵美 専任講師 (共訳)
『行動療法の展開 マルチモード・アプローチ The Practice of Multimodal Therapy by Arnold A. Lazarus, Ph.D.』二瓶社 1999. 8
- 芝野 松次郎 教授 (共編著)
『社会福祉援助方法』有斐閣 1999. 10

学会消息

◇欧州評議会 (Council of Europe) 歴史教育シンポジウム

- 欧州評議会主催のシンポジウム「情報通信技術の挑戦に直面する歴史教育」が、1999年3月25日 (木) から27日 (土) にかけて、アンドラ公園の首都アンドラ・ラ・ヴェラのホリデーイン・クラウン・プラザにおいて開催された。欧州評議会加盟40カ国から26カ国とそれ以外の6カ国の計32カ国から約50名が参加

した。日本は欧州評議会のオブザーバー国であるが、1998年より（財）国際教育情報センターが日本の代表として正式にオブザーバー・メンバーとなっている。本学の真鍋一史教授は（財）国際教育情報センターからの依頼で、日本代表としてこのシンポジウムに参加し、すべてのセッションの討論に積極的に加わり、同時に、欧州評議会の活動に対する日本からの貢献についての提案を行った。

◇国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme) 年次総会および研究発表会

- 国際社会調査プログラムの1999年度の年次総会および研究発表会が、1999年4月23日（金）から28日（水）にかけて、スペイン・マドリッドのホテル・ミンダナオにおいて開催された。本学からは真鍋一史教授が日本代表メンバーとして参加し、2000年度実施の「環境に関する意識と行動」調査の調査票原案作成委員として活動し、2001年実施の「社会関係とサポート・システム」調査の基本的アイデアをめぐる討論に加わり、さらに研究発表会において「ナショナル・アイデンティティの国際比較」と題する報告を行った。なお、この報告に対しては、関西学院大学から国際学会・会議報告者等助成があたえられた。

◇データ解析国際会議 (International Conference on Large Scal Data Analysis)

- データ解析国際会議が1999年5月25日（火）から28日（金）にかけてドイツ・ケルン大学で開催された。この国際会議は、国際社会調査プログラム (ISSP) の1985年から1995年までの調査データのさまざまな視座からの2次的分析の試みを目標とするものであり、今回は世界の22ヵ国から126人の研究者が参加した。本学からは真鍋一史教授が出席し、「ナショナル・アイデンティティの構造」というテーマで研究発表を行った。

◇関西社会学会

- 関西社会学会大会シンポジウム『臨床の言葉と学の言葉』が1999年6月5日（土）～6日

（日）にかけて、関西大学において開催され、本学の宮原浩二郎教授は司会を務めた。真鍋一史教授は「エスニシティ・国際関係」のセッションで、「ナショナル・アイデンティティの構造——ISSP 国際比較調査のデータ解析——」と題する報告を行った。

◇日本比較政治学会

- 日本比較政治学会1999年度研究大会・総会が6月26日（土）・27日（日）の両日、早稲田大学において開催された。本学からは真鍋一史教授が参加し、「政治文化とナショナル・アイデンティティ——比較政治学の新しい領域の提案——」というテーマで研究発表を行った。

◇日本社会学会

- 日本社会学会が1999年10月10日（日）—11日（日）の両日、上智大学において開催された。本学から「研究法・調査法」のセッションで真鍋一史教授が司会を行った。「都市」のセッションでは「居住類型別ネットワーク特性とボランティア・アソシエーション」というテーマで大谷信介教授が研究発表を、「産業・労働・組織1」のセッションでは川久保美智子教授が司会を行った。国際交流委員会特設部会の「国際交流の技法と現状」のセッションでは「英語論文の技法」というテーマで高坂健次教授が研究発表を、社会学教育委員会特設部会の「社会学教育と資格問題をめぐって」のセッションでは「関西地区の社会調査士制度の現状と課題」というテーマで大谷信介教授が研究発表を行った。「阪神・淡路大震災と社会学の可能性」のセッションでは「震災調査の存在論的意味」というテーマで荻野昌弘教授が研究発表を行った。シンポジウム、「ミスター・ノーマルのアイデンティティを問う」のセッションでは「アイデンティティー以前——「Mr.Nobody は私だ！」——というテーマで研究発表を、「モダニティの行方と主体像」のセッションでは宮原浩二郎教授が「主体性の現象学」について討論を行った。

執 筆 者 紹 介 (掲載順)

高 坂 健 次	関西学院大学社会学部教授	岩 本 茂 樹	関西学院大学大学院社会学研究科研究員
宮 田 満 雄	関西学院大学名誉教授	桐 野 由 美 子	京都ノートルダム女子大学生活文化学科助教授
倉 田 和 四 生	関西学院大学名誉教授	圓 田 浩 二	関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程
殷 秀	吉備国際大学大学院修士課程	李 為	関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程
八 木 克 正	関西学院大学社会学部教授	古 家 曜 子	関西学院大学兼任講師
岡 田 弥 生	関西学院大学社会学部助教授	森 川 甫	関西学院大学社会学部教授
佐々木 薫	関西学院大学社会学部教授	福 地 直 子	関西学院大学社会学部専任講師
山 路 勝 彦	関西学院大学社会学部教授	福 永 英 彦	関西学院大学大学院社会学研究科研究員
真 鍋 一 史	関西学院大学社会学部教授		

社 会 学 部 研 究 会 会 員

会 長	高 坂 健 次	春 名 純 人	石 川 明
運 営 委 員	森 川 甫	大 谷 信 介	R.M. グルーベル
会 計 監 査	奥 野 卓 司	紺 田 千 登 史	
書 記	中 山 慶 一 郎		
名 誉 会 員	速 水 幸 一	遠 藤 惣 一	船 本 弘 毅
	張 光 夫	J. A. ジョイス	小 関 藤 一 郎
	半 田 一 吉	萬 成 博	宮 田 満 雄
	倉 田 和 四 生	中 野 秀 一 郎	西 尾 朗
	村 川 満	岡 村 重 夫	領 家 穰
	西 山 美 瑳 子	杉 山 貞 夫	田 中 國 夫
	杉 原 方		
	(A. B. C 順)		
普 通 会 員	武 田 建	牧 正 英	佐々木 薫
	森 川 甫	中 山 慶 一 郎	津 金 澤 聡 廣
	春 名 純 人	紺 田 千 登 史	真 鍋 一 史
	山 路 勝 彦	山 本 剛 郎	高 田 真 治
	荒 川 義 子	安 藤 文 四 郎	浅 野 仁
	高 坂 健 次	石 川 明	對 馬 路 人
	芝 田 正 夫	芝 野 松 次 郎	藤 原 武 弘
	宮 原 浩 二 郎	藤 戸 淑 子	立 木 茂 雄
	田 中 耕 一	居 樹 伸 雄	八 木 克 正
	奥 野 卓 司	久 保 田 稔	大 谷 信 介
	川 久 保 美 智 子	R.M. グルーベル	室 田 保 夫
	A. ブレイディ	荻 野 昌 弘	三 浦 耕 吉 郎
	岡 田 弥 生	福 地 直 子	難 波 功 士
	野 波 寛	川 島 恵 美	池 埜 聡
	打 樋 啓 史		

関西学院大学社会学部研究会会則

第 1 章 総 則

第 1 条

本会は関西学院大学社会学部研究会と称する。

第 2 条

本会は本学部における社会学と関連諸科学の教育・研究の推進を計ることを目的とする。

第 3 条

本会は事務局を西宮市上ヶ原一番町 1—155 関西学院大学社会学部内におく。

第 2 章 事 業

第 4 条

本会は第 2 条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究会などの開催
2. 機関誌「関西学院大学社会学部紀要」などの刊行
3. 会員相互の研究・教育に関する連絡および協力
4. 本学部の教育・研究に対する協力
5. 国内外関係諸学会との協力
6. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第 3 章 会 員

第 5 条

本会の会員は次のとおりとする。

1. 名誉会員 本会に功労のあったもので、本会の推薦するもの
2. 普通会員 本学社会学部専任の教授、助教授、講師および助手
3. 賛助会員 本会の趣旨に賛同するもの

第 4 章 運営組織

第 6 条

第 2 章記載の事業を行うため、本会には以下の委員、委員会等をおく。

1. 会長は当該年度の社会学部長とし、本会には以下の委員、委員会等をおく。
2. 運営委員（6 名）：運営委員は普通会員の中から互選し、運営委員会を構成する。
3. 運営委員長（1 名）と会計（1 名）：運営委員長と会計は運営委員の中から互選する。
4. 運営委員会は第 4 条に記された事業の企画・運営にあたる。

なお、機関誌「社会学部紀要」の編集については運営委員会内に複数の委員をもって構成される編集委員会を置く。編集委員長は、運営委員長が兼ねることがある。

5. 会計監査（2名）：会計監査は普通会員の中から互選する。
6. 書記は社会学部事務長に委嘱する。

第 7 条

本研究会委員の任期は2年とする。重任を妨げない。

第 5 章 総 会

第 8 条

総会は定期総会と臨時総会とし、会長が主宰する。定期総会は毎年一回開催され、臨時総会は会長が必要と認めたとき、あるいは普通会员の1/2以上の要求があった場合に開催される。議決は出席者の過半数をもって行う。

第 9 条

総会の承認を必要とするものは第6条第1項のほか、次の事項とする。

1. 事業計画および収支予算
2. 事業報告および収支決算
3. その他運営委員会において必要と認めた事項

第 6 章 会 計

第 10 条

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第 11 条

本会の経費は次の収入をもってあてる。

1. 会 費
普通会员年額 31,200円
賛助会員年額 10,000円
2. 寄付および補助助成による金品
3. その他の収入

第 12 条

本会員および本学社会学部大学院学生・大学院研究員並びに学部学生は機関誌の配布を受ける。学生の購読費は年間2,600円とする。

付 則

第 1 条

本会の事業運営に必要な諸規定は、運営委員会の議を経て別に定めることができる。

第 2 条

本会の会則変更および本会の解散、ならびに、これに伴う財産の処分等については、総会において、出席者の2/3以上の同意を得ることを要する。

第 3 条

本会則は1992年4月1日より施行する。

「社会学部紀要」編集内規

1992年4月1日施行

1996年10月23日改正

1. 「社会学部紀要」（以下、本紀要という）は原則として、当該年度中に2回発行する。6月末を締切日とする号は10月上旬の配布を、11月末日を締切日とする号は3月25日の配布を目標とする。
2. 本紀要の企画、編集、発行は社会学部研究会「社会学部紀要」編集委員会がおこなう。
3. 本紀要に掲載される原稿の種類は以下に掲げるものとする。

- ①原著
- ②研究ノート
- ③学部および社会学部研究会主催、共催の講演会の講演原稿
- ④書評、内外の学術研究、学術集会の動向の紹介
- ⑤社会学部最優秀卒業論文賞（安田賞）受賞論文
- ⑥その他編集委員会が必要と認めた記事

4. 本紀要への投稿有資格者は社会学部研究会名誉会員、ならびに普通会员とする。なお、共同執筆者は名誉会員あるいは普通会员の推薦を受けた者、名誉会員あるいは普通会员と共同研究をおこなった者とする。

上記以外の投稿者に関しては普通会员による推薦と編集委員会の審査を経て2名を限度として掲載することができる。

大学院学生ならびに研究員単独の論文原稿の掲載に関しては、普通会员による推薦と編集委員会の審査を経て決定する。

5. 原稿の執筆に際しては、以下の様式に従うものとする。

- ①原著については、原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙100枚以内、研究ノートについては原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙60枚以内とする。ワードプロセッサによる原稿については字数においてそれらに相当する分量とする。
- ②手書き原稿に用いる原稿用紙は研究会指定の200字詰め横書き原稿用紙とする。
- ③図表、写真等は題字、説明つきですべて本文とは別紙とし、本文中に挿入する個所を本文欄外に指示すること。

図表・写真等の費用は50,000円を限度として社会学部研究会が負担するが、それを超える分は執筆者の負担とする。

- ④原稿には和文および英文の表題、さらに欧文の要約をつける。また執筆者名、所属機関名についても同様とする。
- ⑤原稿に3語のキーワードをつける。
6. 本紀要に発表する原著論文、研究ノートは他に未発表のもの、または学会大会等での口頭発表の主題をその学会等の了解のもとに原稿にまとめたものに限られる。
7. 外国語による原稿については編集委員会において審議の上、許可することがある。分量は日本語原稿の場合に準ずるものとする。
8. 編集委員会が依頼した外国語原稿を翻訳して掲載する場合には、その翻訳者に対し翻訳料を支払うものとする。その金額については社会学部研究会運営委員会で審議の上決定する。
9. 本紀要に掲載された論文等は無断で他の雑誌等に転載することを禁ずる。

また、執筆者がすでに外国語または日本語で発表した論文等を日本語または外国語に翻訳して掲載を希望する場合には、編集委員会において審議のうえ、それを許可することがある。ただし、この場合、版權処理に関する責任は全て執筆者が負うものとする。その場合の翻訳料は支払わない。

10. 本紀要の執筆者に対しては本誌1部と抜刷100部を無料で配布する。ただし、それ以上の抜刷を希望する場合、その実費は本人の負担とする。
11. 発行された紀要は名誉会員、普通会员、大学院学生、大学院研究員および学生に配布する。その年度の非常勤講師にも配布する。また、本紀要は上記以外の者に頒布することができる。なお、頒布料は原則として学生の購読料と同額とする。
12. この編集内規は研究会運営委員会の議を経て変更することがある。ただし、その変更はその年度の社会学部研究会総会で報告されなければならない。

＜編集後記＞

『社会学部紀要』第83号を宮田満雄名誉教授の退職記念号として発刊致します。本号の前に、第81号、船本弘毅教授、第82号、村川満教授、また、後には、第84～87号、遠藤惣一教授、武田建教授、牧正英教授、津金澤聡廣教授の各記念号が続きます。いずれも社会学部のために創設期あるいは、初期から尽力して下さった先生がたの記念号です。

宮田満雄先生が一旦、母校を離れて、再び、帰ってこられた1970年4月は、私たちの関西学院大学は全共闘によって封鎖され、あの大紛争の真只中でした。平穏な女子大から帰って来られた先生に対して、その時、私は「飛んで火に入る夏の虫」と申し上げたような時代でした。先生は直ちに、紛争の解決のために働かれ、以後、学部、大学において重要な職務に就かれ、終わりの10年間は、院長職を務められました。その間、もちろん、社会学部の教育にも尽くされ、研究も進められました。先生の貴い御働きと与えられました交わりを厚く感謝致します。

定年を待たずして、本年4月に聖和大学の学長に就任されましたことは、同じ学部で共に働くことができないので残念ではありますが、大変名誉なことです。今日、大学は大きな変動期を迎えており、多くの私立大学が興亡の危機に直面しているとも言えると思われます。危機の時代において、キリスト教主義の大学である故、果たすことのできる大学教育があると思います。先生の信仰、学識、経験を生かし、聖和大学学長の重責を果たされるだけでなく、全国のキリスト教主義諸大学の指導者として御活躍下さいませよう、お祈り致します。

この記念号のため、多くの方々が寄稿して下さい大変有難うございます。また、湯原陽里香主事が細心の注意と配慮をもって編集実務を果たして下さいました。厚く感謝致します。
(森川 甫)

1999年11月5日 印刷

1999年11月15日 発行

編集発行人
発行所

高 坂 健 次
関西学院大学社会学部研究会
〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町
関西学院大学社会学部内
電話(0798)(54)6202

印刷所

尼崎印刷株式会社
〒661-0957 尼崎市下坂部3丁目9番20号
電話 (06) 6494-1122(代)

KWANSEI GAKUIN

SOCIOLOGY DEPARTMENT STUDIES

(SHAKAIGAKUBU-KIYO, KWANSEI GAKUIN DAIGAKU)

No. 83

November 1999

In commemoration of Professor MIYATA Mitsuo

The Study Association of Sociology Department

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Nishinomiya, Japan
